

# 日本における韓国人父母の言語教育観

## —父母の日本滞在歴と子どもの教育レベルを中心に—

朴 貞玉

### 1. 研究背景と問題の所在

近年、グローバル化の進行により日本国内においても就労や定住のために来日する外国人の数は年々増加現象を見せている。中でも子どもと一緒に来日しているほとんどの韓国人父母たちの中心的関心事は「子どもの教育をどうするのか」という教育戦略の問題である。しかし、これまでの教育に関する先行研究では、教師の重要性をはじめ、子どもをとりまく環境や父母（保護者）の重要性を指摘しつつも子どもに焦点を当てた研究がほとんどで、父母に焦点を当てた研究はあまりない。また、年少者の言語能力は年少者本人だけの問題ではなく、その年少者と密接な関係にある教師や保護者の意識とも関連する。なぜなら、父母（保護者）は順応性の高い年少者の言語能力の伸張を左右する重要な存在だからである。

### 2. 先行研究

日本滞在外国人保護者を対象とした子どもの教育に関する研究は、方法論として、質的、量的調査が行われている。また、子どもの言語面、生活面、心理面などについて保護者（父母）たちの意識に焦点を当てた研究はこれまであまりなされてこなかったが、僅かながら散見されている。例えば、外国人保護者の言語教育観を調査した石井(2000)、志水・清水ら(2001)、朱(2002)などがある。

石井(2000)は、各都県の教育委員会を通じて選定した、主として関東甲信越地方の小学校・中学校131校(公立)に在籍する、ポルトガル語を母語とする外国人児童生徒の父母369名を対象に、言語教育に関する意識調査を質問紙調査法で行った。その結果、父母の言語教育観については、日本と母国の二文化・二言語に接する子どもたちがどちらの能力をも充分に発達させることを重視していることが明らかになった。また、志水・清水ら(2001)の研究では、韓国系ニューカマーたちを対象に教育戦略の調査を

行っており、その中での言語教育観に関する主な結果は、帰国見通しの有無に関わらず、多くの家庭で子どもに韓国語を教えているとともに、学齢に応じた韓国の教科書を使い、ハングルの完全な習得を求めているという。親たちは、韓国語を身につけることが、自文化を保持するという意味を持つのみならず、ステップアップの道具として有効であると考えていると報告されている。さらに、朱(2002)は、子どもを公立小学校へ通わせる韓国人の保護者14名に対し、バイリンガリズムの観点に立って韓国語と日本語の二言語を併用する環境にいるニューカマーの子どもたちの二言語能力を調べた。その中で親の言語教育観に関しては、自分の子どもに母語(韓国語)を継承させたいという意識が高く、そのために母語保持の努力をしていると報告されている。

### 3. 研究課題と研究目的

本研究は、日本における韓国学校に子どもを通わせる父母を対象に①「子どもに対する言語教育観」はどのようなものかを明らかにし、教育戦略に影響を及ぼす要因とする②父母の日本滞在歴別に言語教育観がどのように異なるか、③子どもの教育レベル<sup>4)</sup>によって言語教育観がどのように異なるかを量的に検討していくことを目的とする。

### 4. 調査対象者と研究方法

上記の目的のため、東京韓国学校の父母たち約500家庭を対象に質問紙調査を行った。有効サンプル数の韓国学校の父母369名全体の子どものに対する「言語教育観」の構造を把握するために因子分析を行った。また、父母の日本滞在歴、短期、中期、長期と子どもの教育レベル、小、中、高、それぞれによってどのような差があるかを検討するために統計パッケージSPSSを用いて一元配置の分散分析を行った。さらに、有意差の見られた項目については多重

比較を行った。

## 5. 分析結果と考察

### 5.1 言語教育観の因子分析結果

本研究では、子どもを日本の韓国学校に通わせる父母を対象に、子どもに対する言語教育観の概念構造を明らかにしたところ、次のTable 1のとおり、4つの因子が抽出された。その因子は、第1因子「トライリンガル重視（韓・日・英）」、第2因子「バイリンガル重視（韓・日）」、第3因子「韓国語重視」、第4因子「日本語重視」である。それぞれの因子の下位尺度得点ならびに項目内容を以下のTable 1に示した。

### 5.1.1 言語教育観 4 因子に対する考察

第1因子である<トライリンガル重視>では、韓国語・日本語・英語という3つの言語を重要視していることがわかる。「韓国語は、子どもの母語であるということもあって基本的にできるようにさせたい」、「日本語は、せっかく日本に住んでいる恵まれた環境の中でのいるので、どうせならばできるようにさせたい」、「英語は、グローバル化している現状と受験での避けられない必修言語になっているので、これからの子どもの将来のことを思うと英語もできるようにさせたい」という親たちの高い希望が含まれていると考えられる。

Table 1 韓国学校の父母の言語教育観一因子分析

	因子			
	1	2	3	4
<b>第1因子 トライリンガル重視</b>				
グローバル的な今の社会を思うと子どもの英語教育は当たり前だと思う。	<b>0.758</b>	0.206	0.094	-0.038
子どものときから英語に接しておくことは英語に対する親近感が生まれ英語習得によりよい影響を及ぼすと思う。	<b>0.702</b>	0.097	-0.008	-0.061
子どもの教育の中で英語はいずれ必要となるので早い段階から習わせる必要性があると思う。	<b>0.609</b>	0.125	0.005	-0.021
国際人になるためには英語は必要不可欠な言語であると思う。	<b>0.594</b>	0.257	0.070	-0.138
子どもの将来のことを思うと韓国語と日本語はもちろん英語も使用できるような教育方針をとったほうが良いと思う。	<b>0.592</b>	0.353	0.072	-0.055
<b>第2因子 バイリンガル重視</b>				
韓国語と日本語がいろいろな領域で広く使えることは重要であると思う。	0.273	<b>0.766</b>	0.031	-0.031
韓国語と日本語を自由自在に使い分けられたほうが良いと思う。	0.104	<b>0.456</b>	0.051	-0.027
韓国語と日本語が偏りなく使えることは重要であると思う。	0.170	<b>0.428</b>	0.048	0.034
韓国語と日本語が会話力でも読み書きの能力でも高度に発達していることが望ましいと思う。	0.345	<b>0.414</b>	0.130	-0.085
<b>第3因子 韓国語重視</b>				
外での子どもとの韓国語使用に対して私は違和感がないと思う。	0.032	0.259	<b>0.705</b>	0.082
外での子どもとの韓国語使用に対して私は違和感があると思う。	0.036	-0.073	<b>-0.633</b>	0.099
外での子どもとの会話は日本語のほうが良いと思う。	0.008	0.187	<b>-0.550</b>	0.337
外での子どもとの会話は韓国語のほうが良いと思う。	0.162	0.050	<b>0.505</b>	-0.023
<b>第4因子 日本語重視</b>				
日本にいるのだから韓国語を忘れることにあまり神経質になる必要はないと思う。	-0.013	-0.171	0.005	<b>0.573</b>
日本で生活するには、まず日本語を学習することが必要で、韓国語のことはあまり考えなくても支障はないと思う。	-0.194	-0.027	-0.065	<b>0.559</b>
日本語が早く上達するように家庭では日本語を使ったほうが良いと思う。	-0.006	0.085	-0.085	<b>0.451</b>
寄与率(%)	15.2	9.7	9.4	6.3

第 2 因子である<バイリンガル重視>では、韓国語と日本語の両言語を重要視していて、母語である韓国語も生活場の言語である日本語もどちらに偏った水準のレベルの言語能力ではなく、それぞれの言語を流暢に使い分ける言語能力を子どもたちに持って欲しいとの親たちの考え方が窺える。

第 3 因子である<韓国語重視>では、家庭ではもちろん、外でも韓国語を使うことを重要視していることから、韓国人である以上しっかりした母語を身に付けて欲しいとの親たちの強い願いが込められていると言えるだろう。

第 4 因子である<日本語重視>では、子どもを韓国学校に通わせているということで韓国語に対する不安はそれほど高くない反面、学校は韓国学校へ通わせていても実際には日本で生活をしている彼らにとっては日本語が必要不可欠な言語になるのは当然のことだと考えられることから、親たちは日本語を重視していると思われる。

## 5.2 言語教育観と父母の日本滞在歴との分散分析結果

言語教育観に影響を及ぼす要因とする父母の日本滞在歴との関連を分散分析によって検討した結果、次のとおりとなった。

父母の日本滞在歴による言語教育観の違いが有意であったのは、<バイリンガル重視> ( $F(2,350) = 4.179, p < .05$ ) の 1 つの因子であった。有意差の認められた 1 つの因子について、さらに Tukey(T) 法を用いた多重比較を行ったところ、<バイリンガル重視>では『中期型』(平均値 3.95 : 以下カッコ内は同様に小数点第 2 位までの平均値を表す)と『長期型』( $M = 4.16$ )との間に有意差があることが明らかになった。一方、<トライリンガル重視>、<韓国語重視>、<日本語重視>である 3 つの因子においては、父母の日本滞在歴による有意な違いは認められなかった。

### 5.2.1 言語教育観と父母の日本滞在歴での有意因子に対する考察

父母の『日本滞在歴』の分析においては<バイリンガル重視>の言語教育観の因子で有意な違いが確認された。以下、考察を行う。

この因子では『長期型』の平均値が『中期型』のそれを有意に上回っていることから、【長期型の親は中期型の親よりバイリンガルを重視する】と解

釈することができる。母語である韓国語をしっかりと勉強させたいという気持ちが強い親はやはり長期型に多いだろう。しかし、母語にだけこだわってられないのも長期型の親たちで、子どもの日本での生活のことも同時に考えなければいけない。日本で生活をする上で一番基本的に必要とされるものは日本語である一方、自国の言葉も忘れさせたくないため、親たちはバイリンガルの言語教育をさせたいと考えるのが自然なのかもしれない。

このように、日本に長く住めばすむほど母語喪失が心配になるだけではなく、長期型のほとんどがいつまで日本に滞在するかがわからない場合が多いため、日本での生活も無視できない状況になっている。したがって、父母たちは子どもにどれか一つの言語を中心に言語教育を行うわけにはいかなくなってくるのだろう。

## 5.3 言語教育観と子どもの学校での教育レベルとの分散分析結果

最後に、韓国学校に子どもを通わせる父母達の「言語教育観」は『子どもの教育レベル』小、中、高、それぞれによってどのような差があるか、分散分析を行った結果、子どもの教育レベルによる言語教育観の有意な差異は何も認められなかった。

この結果の背景としては、親たちは、何語を教えるにせよ、来日時や、子どもの状況に応じて言語教育方針をとろうとしていることが窺える。英語は小学生になる前の幼児期から、日本語は日本に来日したその時点から、韓国語は時期を考慮せず、それぞれの言語学習を採用している。したがって、言語教育観が教育レベルによる影響がなかったと考えられる。

## 6. 今後の課題

本研究では、教育戦略に影響を及ぼす要因として父母の日本滞在歴と子どもの教育レベルをあげて明らかにしているが、それ以外の要因として、父母の来日目的及び来日動機、経済状況などについては明らかにしていない。また、この研究では言語的な面は取り上げているものの、異文化の環境で問題化されやすい文化的な面は取り上げていない。よって、今後はより多様な教育戦略に影響を及ぼす要因を追加させると同時に文化的な面も取り入れて韓国人父母たちの子どもに対する異文化での意識はどのようなものなのか検討する必要があると考えられる。

注

- i 滞在期間：日本出入国管理事務所では定められている滞在別の期間を参考に本研究では、短期型を1ヶ月～3年未満、中期型を3年～6年未満、長期型を6年以上と定めることにする。
- ii 教育レベル：学校での学年を一年ごとの違いで捉えるのではなく、初等教育・中等教育・高等教育という大きな枠組みでの違いを指している。

参考文献

- 石井恵理子 (2000) 「ポルトガル語を母語とする在日外国人児童生徒の言語教育に関する父母の意識」『日本語科学』5 pp.116-136 国立国語研究所
- 石黒広昭 (2000) 「異文化問題の中にあるの言語発達」『月刊言語』7月号 pp.76-83
- 内田紀子 (2000) 「入国児童をとりまく人々の意識—教師・保護者・日本語指導員の場合—」お茶の水女子大学修士論文
- 岡崎敏雄 (1998) 「年少者日本語教育に関する教師の言語教育観」『日本語科学』4号 pp.74-98 国立国語研究所
- 加賀美常美代 (2004) 「教育価値観の異文化間比較—日本人教師と中国人学生、韓国人学生、日本人学生との違い」『異文化間教育』19号 pp.67-84 アカデミア出版会
- 佐藤群衛 (1996) 「日本における二言語教育の課題」駒井洋監修・広田康生編『多文化主義と多文化教育』明石書店
- 志水宏吉、清水陸美 (2001) 「ニューカマーと教育」学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって
- 朱ヒョン淑 (2002) 「日本語を母語としない児童の母語力と家庭における母語保持—公立小学校に通う韓国人児童を中心に—」お茶の水女子大学修士論文
- 関口智子 (2003) 『在日日系ブラジル人のたち:異文化間に育つ子どものアイデンティティ形成』明石書店
- 中島和子 (2004) 「第二言語としての日本語の獲得と母語の後退—新来ブラジル人小中学生のバイリンガル調査より」『応用言語学研究』6号 pp.67-81
- 西原鈴子 (2007) バイカルチュラル家族の言語獲得と言語運用 (特集 バイカルチュラル家族—複数の文化と言語が交叉するところ)『異文化間教育』26号 pp.54-60
- Lambert, W. E. (1975) Culture and Language as Factors in Learning and Education. In A. Wolfgang (ed), Education of Immigrant students. Toronto:Ontario Institute for Studies in Education pp.133-148

ぱく ちゃんおく／お茶の水女子大学大学院 日本語教育コース  
ogigugigundam@yahoo.co.jp